

# 地域の話題

## 南 養護老人ホーム拡充を 上代議員が追及

上代議員は、単身高齢者や高齢の夫婦世帯にとつて終の棲家をどうするかは不安な問題であること、様々な高齢者施設があつても多額の費用がかかることを強調。低所得者の方は養護老人ホームへの入所措置となる指摘し、平成29年度入所措置数が15人、直近(平成30年8月末)の待機者が13人であると紹介。「入

所判定審査会で措置が必要と判断されているのに、待機状態というところは施設が足りていない」と質しました。健康福祉部長は「住み慣れた地域で自分らしい生活を人生最期まで続けられるよう今後も検討していきたい」と答弁しました。「上代かずみの議会報告」より

## 出 100万の税金使つて ベトナム海外視察

昨年12月議会で国際交流促進事業として

年間100万円の公費を使い、議員を海外派遣する提案が出され、後藤由美市議は反対しました。議員が国際交流や海外を訪問し、見聞を広めることは意義あることですが、行財政改革と称して市民には負担を強いておきながら、公費を使って海外とは理解が得られません。「ごとう由美の議会報告」より

## 江 津 後期医療2割負担 反対の陳情不採択に

年金者組合県本部石見支部は、3月定例会に「75才以上の医療費の窓口負担2割への引

き上げを中止するよう要求する意見書を国へ提出」する陳情を行いました。森川佳英市議は「老人クラブや医療関係団体から慎重な意見が相次いでいる。わずかな年金収入で暮らす高齢者を医療から遠ざけ、重症化を招く」と賛成討論に立ちました。

採決では、共産党市議団と市民クラブ(社民)の計4人が賛成したものの、政友クラブ(自民)と公明の計10人が反対したため、陳情は不採択となりました。「ごとう民報」より

## 党員の人生かけた決意に感銘

「武夫さんが去年4月の市議選に立候補することになりました。何かアドバイスがあつたらお願いします」



院議員  
衆議  
前議

## 大平よしのぶ



昨年6月頃、九州は福岡県飯塚市に住んでいる親戚のおばさんから突然メールが届きました。よく聞けば私の母の兄で伯父にあたる鶴沼武夫さん(メールの主はそのお連れ合いさん)が、統一地方選の一つとしてたたかわれる飯塚市議選に立候補すること。「アド

バイスなんておこがましい。がんばりがいる時代、武夫さんの持つ圧倒的なパワーで大いに党の風をふかせ必ず勝利を！ぜひ応援にいきます」と返事を書き、先日、中国・九州両ブロック事務所相談し、了解を得てかけつけました。

飯塚市といえば麻生財務大臣の地元で、一昨年には市長が賭け麻雀で辞職。昨年の西日本豪雨では最大2メートルの浸水被害がありました。市政を市民の手に、暮らしと福祉、防災最優先の市政実現を市民の切望にこたえるために議席増をめざし、71歳新人の伯父が立候補を決意。伯父は昔からまっすぐでとことん人のために動く人でしたが、久々に再会し何歳になっても変わらないその姿勢にとても感動しました。



■初当選でダルマに目を入れる中林さん。(雑賀三番街にあった狭い選挙事務所は9号線の歩道にまで鈴なりの人であふれた)

## 女性のエネルギー開花

「さわやか三十三歳、島根初の婦人代議士誕生」。40年前の秋、衆院選翌朝の地元の一面トップを中林よし子さんが飾った。候補者を決意して4年目の快挙だった。

選挙取材を終え、勝利の美酒の酔いが残る翌朝、赤旗編集局から派遣されていた記者とともに、モーニングコーヒーを飲み、喫茶店に立ち寄った。

## 「これからは女の時代だね」と

喫茶店には、見知らぬOL風の4、5人の先客があつた。誰はぼかることなく「中林さんヤツタよね」「実は、私入れたのよ」「これからは女の時代だね」。なんともスゴイ会話に圧倒された。同僚の記者は「保守風土に地殻変動が起きた。女性パワーが開花した」とつぶやいた。

## 元衆議院議員(4期9年)

# よし子さんを語る

## 見知らぬ女性から息子への小包み

「息子さん(当時7歳)に小包が届いた。中には手作りのケーキや図書券が入っていた。「今、あなたのお母さんは、みんなのしあわせのためにがんばっています。お母さんといっしょにいらなくてもさみしいでしょうけどがんばってね。おばちゃんたちがあなたについていますから」と。この手紙に、息子さん以上に励まされたとおぼしき中林よし子さん。おそろく、小集会で、よし子さんから、政治変革への情熱とともに子育ての悩みを聞きつけた女性が送ってきたものである。男の秘書「大物政治家」たちではわからない子育てや暮らしの苦労を「よし子さんならわかってくれる」と託したのだ。

## 島根で起きた変化とは

よし子さんが初当選を果たしてまもなく、編集局から新人の女性記者が取材に入ってきた。「島根で起きた政治変化を取材するために来ました」。それから3週間に渡って各地を取材し、赤旗に「現代日本女性考」という島根の漁村や山村での女性のリアルな変化の様子が連載された。帰郷の際、その記者は「それまで選挙といえど夫のいうとおりに投票してきた島根の女性が今回は自分の意思で投票した。よし子さんの勝利は、島根女性の勝利だったのです」と感激していたことを覚えている。(つづく)